〔研究ノート〕

序章とエピローグ：二つの章から成るアメリカ史

小　谷　一　明

Benjamin Franklin が呼ぶところの「素晴らしい白人」の国家建設のために，Thomas Jefferson は共和主義的美徳をかかげた。共和主義的美徳は，道徳的に腐敗したイギリスからの独立を促し，独立後は勤労や節制による利己的な欲望の抑制を要求した。自ら「鉄の檻」（'iron cage'）に閉じ込めることになった国民の欲望は，暴力的な性格を構成するようになる。黒人やインディアンに対し白人はその暴力を向けていくが，共和主義的美徳を実現するための「部分的な悪」として容認された。19 世紀終わりになると，アメリカはアジアを中心に国内の抑圧された力を放出していく。「野蛮」な民族を啓蒙するという温情主義を巧みに父権主義と交差させながら「フロンティア」を拡張させていき，このフロンティアでアメリカ国内の抑圧された欲望を「血抜き」し，経済的，文化的再生をはかっていく。

以上が 1979 年に出版された Ronald Takaki, *Iron Cages: Race and Culture in 19th-Century America* の概要であるが，タカキ氏はこうしたアメリカの指導者が作り出すイデオロギーを，人種，ジェンダー，階級を中心に記述していく。ただしそれぞれを個別に見ていくのではなく，相互に連関した有機的な問題として扱うことで，アメリカン・イデオロギーの変容とその効果を浮かび上がらせた。つまり公文書，文学，日記，伝記といった公私織りまぜた史料を巧みに取り入れ，文化イデオロギーと国民の間の弁証法的な関係を論証していくのである。

1979 年の時点でアメリカは，まだ世界経済という「フロンティア」をなくしてはいなかった。しかし冷戦終結後に加筆された 1990 年版「エピローグ」では，19 世紀末同様に「フロンティア」が消滅している。フロンティアでの攻防がアメリカの自己再生を可能にしてきたのだが，再生の場を喪失したために経済のみならず文化的，政治的にもアメリカは「終焉」へと向かう。タカキ氏は「エピローグ」で，Herman Melville の *Moby-Dick*（1851）最終章を加筆修正している。現代版『白鯨』となっている「エピローグ」では，見えない「権力」が乗組員誰

一人として生き残れない世界の準備を着々と行う風景が描かれる。抑止力を失い加速し続けるペンタゴンといった見えない「権力」に対し，タカキ氏の「エピローグ」は現代版 “jeremiad” となる。しかし読者はエピローグをそれ以前の章と関連づけることで，見えない「白い鯨」の航跡をたどることができるのである。

第一章　共和主義

独立戦争は政治的な目的と同様に，道徳的な目的を持った戦いであった。それは腐敗した王のもとから国民を切り放し，「丘の上の町」建設を目指したピューリタンの祖先へと立ち帰らせることが革命指導者のねらいであった。しかし腐敗したイギリス王からの独立は，国民に封建主義からの脱却と資本主義の更なる浸透をもたらすと同時に，アメリカという国の定義を迫ることになる。革命指導者がアメリカ人を定義しようとした時アメリカ人はもはや英国人ではなく，インディアンと黒人から区分された白人であった。この戦争でアメリカ人は，人種と国民性との関係の定義を，それまで以上に迫られていくのである。

独立戦争が腐敗した父親からの独立であったことから，アメリカ人は自己の欲望を抑制すること（これを本書では “republican ‘iron cage’” 状況と呼ぶ）になるのだが，その抑え込まれた欲望のためにはけ口が求められた。それが「野蛮人」と呼ばれる人々である。彼らは黒人やインディアンに対し，共和国の国民が持ってはいけないとされる資質を押しつけ共和主義的美徳を確認していく。

こうした共和主義的イデオロギーの発展に関しては，Benjamin Rush とトマス・ジェファソンを通して考察できる。ともにアメリカの啓蒙主義者，革命指導者，共和主義の哲学者であり，それぞれ *Medical Inquiries and Observations upon the Diseases of the Mind* (1812), *Notes on the State of Virginia* (1785) において，共和国国民としての道徳・倫理観，行動の指針を示した。その一方で，両者ともアメリカを白人中心の同質社会へと確立していく。ラッシュは感化院を設立することで，ジェファソンはルイジアナ購入を行うことで，その「自由な」白人帝国を拡大していったのである。

ラッシュは，ペンシルバニア奴隷制廃止促進協会創立者であり，大陸会議の一員であり，独立宣言の署名を行った一人でもある。また，ペンシルバニア大学の医学部教授であり，ペンシルバニア病院精神病棟の院長でもあった。アメリカ精神医学の父とも呼ばれうる彼は，アメリカ人種社会に治療を施そうとしたのである。

彼の幼少時代は，大覚醒運動の渦中であった。涙を流しながら道徳的腐敗に対し警告を発する牧師たちの影響を受け，彼自身の自伝によると，自己否定と勤労の人生を送った（実際には女性との交際に関しては自制心が欠如していた）ようである。彼はアメリカ国民に，自制心のネジを巻いた“republican machines”となるよう要求し，彼らが有徳にならない限り独立戦争が完了しないと述べている。

ラッシュは精神の改善には，牧師同様医学が大きな役割を担っていると考えた。1787年に精神病患者の治療を始めると，彼は精神病と怠惰，不摂生，自制心の喪失を結びつけるようになる。とりわけ，自慰行為は合理主義精神の最たる欠如と考え，そのもっとも効果的な治療法として瀉血，下痢の促進を掲げる。その際治療を行いやすくするため，彼は“Tranquilizer”という拘束椅子を発明した。このように病気を共和主義的言語に置き換えながら，彼は病院で同質な人間，彼が「天使」と呼ぶ人間を作り出し始めるのである。しかし父親＝医者としてのラッシュによる息子への体罰実験は，間接的に彼を重度の鬱病患者にする。息子は父親の精神病棟で27年間闘病した末，死に追いやられることになる。

またラッシュは，黒人も彼の治療対象と考えた。彼は黒人の人種的劣等を彼らの社会環境，奴隷制が原因であると考え，奴隷制をこの国から「血抜き」する必要があると考えた。その一方で，黒人の皮膚や身体的特徴が，主にらい病から由来するという驚くべき報告を1772年に行う。黒人の肌の色，厚い唇，平べったい鼻，縮れ毛の髪，そして彼らの強い性欲などをらい病患者の特徴と結びつけ，さらに，黒人の人種的劣等が伝染性のものであることを証明する。白人女性が黒人男性と生活をともにしたことで，彼女たちに黒人の劣った性質が伝染したという報告を行ったのである（彼はなぜか白人男性と黒人女性による共棲の例証は掲げない）。

またヘンリー・モスという黒人が，指先から肌が脱色し始め全身に及んだ例を報告しながら，黒人の（その肌の色の）治療として，労働，瀉血，下痢，禁酒と

いった治療法を，らい病の治療法と関連づけながら掲げていく。こうして完全な黒人治療の可能性を説きながら，黒人の伝染を退けつつ治療を施すために，労働治療の場 “asylum” を設定するよう求める。例えばラッシュは，しばらくの間ベッドフォード・カウンティーの農地で黒人を隔離し労働させることを主張した。奴隷制の廃止を進めたラッシュであるが，その一方で人種差別をさらに固定化し，社会全体を白く染め上げていったのである。

これゆえに 1802 年の James Callender による Sally Hemings とジェファソンとの関係記事は，大きな反響を呼んだ。共和国の大統領が，「素晴らしい白人」の国に自ら「しみ」を付け加えることは大変な問題だったからである。この問題に関してジェファソンは，James Monroe 宛の手紙で否定した以外は沈黙を守っている。しかしジェファソンの潔白を信じた孫の Thomas Randolpf 大佐も，ジェファソンとサリー・ヘミングズの子供とが酷似していることを認めている。また 1873 年に彼女の息子の一人である Madison Hemings により，サリー・ヘミングズの長男がフランスで生まれたときジェファソンもそこにいたことが明らかにされている。しかしなによりもこの論争で多くの批評家が，ジェファソンを支持するにせよ非難するにせよ，自らの欲望，とりわけ黒人女性に対しこれまで抑えこまれてきた欲望をそれぞれの批評で露呈していることに注目する必要がある。彼らは自らの共和主義的理念によって抑圧された欲望を，その主唱者にぶつける対象を見つけたのであり，ジェファソンはそうした欲望のはけ口となっていったのである。

第二章　エンタープライズ

Alexis de Tocqueville は，独立革命により王，父親，過去を葬り去ったアメリカに対する危惧を *Democracy in America*（1835－40）において表明している。アメリカ人は，父親との衝突を持たずに大人になった若者のように，自分のことしか考えられない国民となった，と。つまり自分の利益だけを追求するナルシスティックな国民である。封建社会から自由・平等の社会への変遷は，利害中心の人間関係を作り上げたが，そこからは陰鬱な，喜びの消えた社会が浮かび上がる。

このようにトクヴィルは，自制心，富の蓄積が自己否定，快楽の否定をうみ出したとする「神経質な」アメリカを描き出したのである。

1800年から1860年までの市場革命期には，重要なアメリカ経済の変化が見られた。それは，単純な農業中心の商業形態から，高度に複雑な地域産業の専門化である。19世紀初頭は海外貿易を行った海岸沿いの地域を除き，大半の地域は高い輸送費のために農業を中心とした商業さえも不可能であった。しかし1860年までには都市化が進み，輸送機関の発達で全米に市場経済が拡大していく。開拓地の拡大と移住にあわせ，東部，西部，南部という三つの地域が確立し，さらに産業の専門化が顕著になる。東部は生産業と商業，西部（オハイオ，インディアナ，イリノイ）は食料，南部（主にサウス・カロライナ，アラバマ，ミシシッピー，ルイジアナ）は木綿である。とりわけ南部は1840年から60年にかけて木綿輸出高を伸ばし，アメリカ海外輸出高の半分以上を占めるようになる。農業を中心とした商業は企業中心の商業へと変貌し，それに伴いインディアンは辺境へ，黒人は“Bosom”，搾取の対象へと押しやられていく。

市場経済を全国に押し広めたAndrew Jacksonは，孤児として育った。父親は彼が生まれる前に，母親は14歳の時に死に，彼に残された遺産はギャンブルで使い果たしてしまう。こうした事情が，逆に彼を共和主義的な“self-made man”に仕立てていく。彼は法律を学び，土地への投機で身を立て，小売店を開業し富を増大させていく。しかし彼の厳格な自己鍛錬，自制心は，軍人の，インディアン・ヘイターの彼に求めることができる。

彼が国民から共和主義的美徳の持ち主と認められたのは，戦争においてである。1812年の米英戦争，1813－14年のクリーク戦争において「テネシーの勇敢な息子」ジャクソンは様々な病気にかかりながらも苦境を克服し，軍人から“Old Hickory”と呼ばれるようになる。さらに約七万人のインディアンを南部から追い出し，ミシシッピー河以西へ移住させ，三分の一の南部のインディアンを殺害した。ジャクソンは，「こうした殺戮は，最大の善を産み出すための部分的な悪に過ぎない」と博愛主義者に理解を訴えている。彼のインディアン・ヘイティング形而上学は，1832－36年の国家銀行“Second Bank of the United States”との戦いで完成される。彼はこの戦いを通して，真の国民とは農家，機械工，肉体

労働者であり，真摯な労働と節度ある質素な暮らしを営む文化人のことを指すと明示する。ジャクソンの真の国民像からは，土地を耕作しないインディアンや，投資による富の蓄積を扇動する一部特権階級の富豪は外れていく。しかし結果として，農耕社会へのノスタルジアを反映する国家銀行の解体は，逆に市場社会を拡張し，投資家の利益に貢献することになる。これはジャクソンが善良な「父親」を演じつつ，「子供」であるインディアンのいない社会を築いていった過程と同じものである。ジャクソンは信用詐欺師，コンフィデンス・マンであった。

19世紀アメリカ社会において，インディアンや黒人が「子供，野蛮人」として差別化されていく中で，白人女性は，彼女たちの道徳性により高く評価されていく。しかし「真の女性らしさ」というイメージは，「子供，野蛮人」と相互依存関係にあり，白人男性社会を確立するための両輪として機能したのである。

人種差別による支配と，性差を利用した支配が交差する例として，1850年ハーバード大学医学部の入学問題がある。当時学長は作家 Oliver Wendell Holmes であったが，彼ら大学側は三人の黒人と一人の女性の医学部への入学を決定した。決定の背景には，黒人学生が医療技術を学んだ後はアフリカで開業すること，女性の学生には単位認可のテストを受けさせないことの確認があった。しかし，この決定にはすぐに在学生からの反発があり，大学側もこれに屈する形となる。医師の需要が停滞していた時期であったため，彼らを入学させることで大学の品位を落とすことは就職難を招く結果になるとハーバードの学生は考えたのである。さらに依然として，黒人・女性の頭部が白人男性のそれよりも容積が少ないという疑似科学（ホームズは Samuel Morton 医師による *Crania Americana* [1839] を高く評価していた）が信じられていた時代であった。

職場への女性進出が目立って妨げられるようになるのは，1840年代以降のことである。次第に社会が工場システムを取り入れ始め，男性が遠隔地の工場労働に従事し始めると，彼らは自分が精神的活動から疎外されつつあることに気づく。それゆえ女性が家庭において文化，道徳の水準を維持してくれることを期待するようになり，働きに出ることを拒絶する。また女性や黒人が同じ職場で働くようになると，「文化」が「野蛮」の悪影響を受けることになるという口実で，両者とも職場から閉め出すのである。このようにジャクソン期以降の社会では，黒人

と白人女性との両者が，それぞれ「野蛮」と「文化」にステレオタイプ化されつつ，競争社会から疎外されていく。仮に彼らが働くことを許されたとしても，女性は医師ではなく看護婦で満足することを薦められ，黒人は門番であることを強いられた。こうした専門化は医療の世界だけではなく，文化全体がその傾向へと向かっていたのである。活発な競争を奨励しながら，一方で黒人や白人女性を競争社会から排斥する。共和主義的な鉄の檻にいる大学エリートたちは，すぐに自分たちも企業社会の鉄の檻へと封じ込められていくことには気づいていなかった。

第三章　科学技術

19世紀は，アメリカが世界最大の科学技術先進国へと飛躍した世紀である。科学技術の進歩がアメリカ人の発明の才を証明したことにより，アメリカ人は肉体や本能に対する知性の優位をさらに確認することになる。そしてこれまでプロテスタント倫理が果たしてきた肉体，本能を侮蔑する役割を，科学技術信仰が引き継ぐことになる。その信仰は，一層資本家の労働者に対する，白人のマイノリティーに対する，支配，被支配関係を確固たるものにした。

こうした科学技術の進歩は，メイソン・ディクスン・ライン以南の州，「新しい南部」にまで押し寄せる。1870，80年代に入ると，新たな産業構造が確立され，北部と南部のセクショナリズムを超えた「ホワイト・シュープリマシー」が実現する。

南部の産業化は北部の奴隷廃止論者，北部に対する経済的依存への嫌悪感から始まる。南部奴隷所有者は大量の黒人を工場労働へとつぎ込むことで，繊維，鉄鋼産業において北部を追い抜くことになる。こうして南部における黒人労働者の搾取が進行するのであるが，鉄鋼，石炭の大手の会社は，黒人労働者に対し教育，福祉，果てはBooker T. Washingtonのタスキーギ大学への奨学金といった補助を与えた。温情主義が「福祉資本主義」として姿を変えつつ，南部の産業化は進むのであるが，こうした温情主義も新たな問題に直面する。都市化が進む産業社会においては，資本家と労働者の関係が奴隷制時代よりも親密なものではなくなったのである。

しかし，こうした白人の「人種主義的ジレンマ」を解消する大きな出来事があった。ブッカー・ティー・ワシントンによる1895年アトランタ展示会での演説である。この「新たな南部」を象徴する展示会は，最新の科学技術の紹介や，黒人機械工により建造された「黒人ビル」の展示が含まれる。ここで南部史上初の，大勢の白人有力者を前にした，「貴賓」としての黒人による演説が行われたのである。「アトランタ・コンプロマイズ」と呼ばれるこの演説をきっかけに，ワシントンは白人権力者によって黒人指導者（1895年にFrederick Douglassが死んだこととも関係する）に押し上げられる。彼は「新たな南部」産業社会においても，南北戦争以前のように黒人は人種，階級の秩序と調和を求め，白人に対しては父親としての役割を期待するという演説を行った。そして，当時頻発していたストライキに怯える白人資本家に対し，黒人のそうした事態における協力を約束した。彼の演説はアメリカにおける「道徳革命」として絶賛されるなど大きな反響を呼んだ。しかしこの演説が「コンプロマイズ」と呼ばれるのは，1890年代の年間200件近い黒人のリンチ事件やジム・クロウ法案の可決，黒人排除の選挙権規定といった政治状況下で，ワシントンが日和見的な演説を行ったためである。

白人＝資本家階級，黒人＝忠実な労働者という図式は，中国人労働者にもあてはまる。1850年に7,520人であったカリフォルニアの中国人人口は，30年で15倍にまでふくれあがる。1870年にはカリフォルニア人口の8.6パーセントを，賃金労働者の25パーセントを占めるようになる。このような中国人の増加は，アメリカ自由民労働社会を脅かす「中国人問題」として認識されるようになっていく。この問題の発生とともに中国人は，文明の進歩を妨げる「ネズミを食らう」者としてインディアンと比較され，白人労働者の生活を困窮させる「寄生虫」として黒人と比較されるようになる。さらに異教徒，野蛮人，子供，そして食欲，性欲を抑えることのできない人種といった中国人のステレオタイプ化“Negroization”が行われていく。

その一方で中国人は黒人の教育者としても考えられるようになっていく。彼らは寡黙でまじめに働き，しかも機械類を操作する知性を持ち合わせた労働者として評価された。こうして低賃金で効率的に働く中国人は，黒人労働者のみならず白人労働者にとっても脅威的存在となっていく。政府も中国人を白人労働者と資

本家の間に紛争を引き起こす火種として危惧するようになり，1882年，中国人の国内移住を禁止する中国人排斥法案を可決し，さらに彼らの帰化を認めないことに決定した。

しかしアメリカ人が，経済発展のために中国人労働者を必要と考えたのである。この認識は米墨戦争直後のアメリカ最高裁判所顧問，Aaron H. Palmerの発言などに見られる。彼は，カリフォルニアの発展は大陸横断鉄道の建設にかかっており，そのために中国人をその主要な労働者とすべきだと述べている。事実，セントラル・パシフィック鉄道の従業員，一万人の九割が中国人であった。さらに低賃金の長時間労働も中国人が忍従したものではない。例えば1867年，セントラル・パシフィック鉄道に対し中国人はストライキを起こしている。しかし会社側の食料支給の停止や，黒人労働者による差し替えの示唆で威嚇され，一週間以内にストライキは解かれてしまった。また東部では，中国人はストライキ崩しの，ストライキ抑制の道具として必要とされた。マサチューセッツ，ノース・アダムズのサンプソン靴工場で白人労働者がストライキを起こすと，Calvin T. Sampsonは75人の中国人をカリフォルニアからストライキ崩しのために導入する。中国人は到着後三ヶ月以内に，それまでの白人労働者による月別平均生産高を優に越える成果をあげた。サンプソンはそれにより一週間840ドルのコスト削減に成功し，彼の成功は東部のストライキで悩まされていた資本家に，中国人労働者の雇用を踏み切らせることになる。

こうして中国人は，マルクスが言うところの「産業予備軍」の役割を果たしていく。ストライキのときにはそれを突き崩し，低賃金労働と勤労により労働者の鏡としてアメリカ経済の屋台骨を支えていく。しかし，彼らには帰化が認められていなかったため家族を連れて渡米することができず，この過酷な労働を行うと自国へ帰ることになっていたのである。

第四章　帝　国

19世紀後半に至ると，共和主義的鉄の檻（“republican ‘iron cage’”）が，企業型の鉄の檻（“corporate ‘iron cage’”）へと変わる。その資本主義段階では，機械が合理的な勤労という共和主義的美徳のお手本となり，個人は生産過程全体

を見通せない取り替え可能な一部品として働くことが要請される。Henry David Thoreau が，「我々が鉄道に乗るのではない，鉄道が我々に乗るのだ」と語るような状況が到来したのである。歯車が正確にその職務を果たす度合いに応じて企業の利潤が増大し，給料も上がるため，個人は自ずと共和主義的美徳を自らに課さなければならなくなる。Max Weber が言うように，機械産業の世界は個々人の欲望に「鉄の檻」を要求する。アメリカ人はイギリス国王以来の権力に遠隔操作されるようになる。

企業の多角経営化，合弁化により巨大化していく企業は，州政府といった官僚を巻き込み階級権力の道具にしていく。こうした企業は 1877－1897 年にかけて三度の恐慌を経験するが，倒産することができないほどに巨大化しており，破綻できない経営，需要を越えた大量生産は海外市場へとその矛先を向け始める。ジェファソンは，フロンティアが消滅した時アメリカ経済は暗黒期に入ると予告したが，アメリカは「世界経済」に目を向けることでこれを克服する。新たな「フロンティア」は，恐慌による大量解雇といった国内の不満を海外へ放出することで解消し（“regeneration through violence”），ストライキに対する共和主義的自制心を要求する場となった。

こうした共和主義的理念の回復と，新たなフロンティアの要求とを結びつけることに最も効果的な働きを見せたのが，Alfred Thayer Mahan である。1890 年に出版された *The Influence of Sea Power upon History* は，Theodore Roosevelt の帝国主義的性格を決定する書物となった。

アメリカは 19 世紀後半に入ると，しばしば海軍の軍備縮小を行ってきた。マーハンは，官僚が企業にばかり注意を払い海軍へは何の配慮もしなくなったことに腹を立てる。そして，アメリカが世界各地で他の国々と商戦を繰り広げることを予想し，第一級艦船の急造，増強の必要性を説いた。そうした艦船は商船の後見人として，海外石炭補給地確保の武力として必要だったのである。彼はアジアにアメリカ帝国主義の矛先を向けるのだが，その際に社会進化論とプロテスタント倫理を使って論じている。アジアは文明を開化させる潜在的能力を秘めた大陸であるが，人々は怠惰で競争を嫌うため，それを充分に活用していない。彼らはその広大な土地を有するのにふさわしい性格を持ち合わせていないのだ，とマーハ

ンは論じている。インディアンに対するジャクソン大統領のように，マーハンのアジアに対する拡張論は“Race Patriotism”をはらんでいる。つまり野蛮な中国人を再生させる責任感を自らに課し，西洋の前衛として中国，東洋において振る舞うといった白人至上主義である。

彼が増設した海軍は，それ自体アメリカ共和・禁欲主義の聖地であった。そこは自制心と勤労が求められる場であり，厳しい戒律を維持する必要のある場である。そしてマーハンは，ストライキが頻発したこの時期のアメリカが最も嘱望した，共和主義的美徳を備えたヒーローであった。しかし彼の自制心は，彼の自然な衝動と結びついていたのである。彼は女性に囲まれることよりも，海軍の世界で男性に囲まれていることを好んだ。Samuel Asheへの手紙から，彼に生涯にわたる愛情を誓っていることがわかる。海軍という男性社会で自制心を持って働くことが，アメリカ禁欲主義の最も称賛に値する道徳的表明であると彼は述べているが，マーハンは自然な欲動からアメリカを「男性的で戦闘的な美徳」を持つ国家へと変貌させようとしたのである。アメリカは，中国の抵抗に対し，断固とした対処をとる方向へと進んでいく。

マーハンは海軍をないがしろにした官僚，企業に対する批判を行い，ストライキを行う自制心のない国民に対し共和主義的個人主義の復権を説いた。しかし彼ら帝国主義者は，結果的には海外進出の場を作ることでますます抗し難い企業支配の社会を押し進めることになる。マーハンが海軍兵に与えられるだろうと説いた名誉や威厳も，彼が侮蔑した企業からの寄付金の額で決定されるのである。またマーハンが自制心の訓練の場として創設した“New Navy”も，社会的に自制心を強制する制度を作り上げてしまうという点で，ますます個人主義を窮地に陥れることになるのである。こうして1890年代における米西戦争からフィリピン併合へと，アメリカはアジアへ向けて国家の抑圧された欲望を解き放つ。企業と軍隊が結びつくこの帝国主義的な美徳が，三つ目の鉄の檻，“demonic ‘iron cage’”をもたらすのである。

エピローグ

この作品は1979年に出版されたが，タカキ氏は1990年に「エピローグ」を付け加えた。この「エピローグ」を付け加えた理由は，20世紀末を迎えるにあたり，その状況が前章の19世紀末アメリカといくつもの類似点を持ったからである。人種，階級の急速な分離現象，新たなクセノフォビア（アジア，ラテン系移民に対する反感），「世界経済」においてではあるがフロンティアの消滅，下降線をたどる経済状況など，現在の情勢は19世紀末状況と相似的な関係をなしている。

20世紀末の状況を幾つか具体的に列挙してみたい。アジア人と黒人というマイノリティー間で見られる国家的な共和主義的身振り。アジア系移民の勤労がその生活水準の高さ（実際高いわけではないが）を産み出したという神話による，黒人の労働意欲の無さに対する“jeremiad”。アメリカの福祉行政による黒人＝下層階級の固定化。経済の空洞化によるブルー・カラーの需要削減。大学を卒業していないマイノリティー，プエルトリコ人移民を中心とした大量解雇，就職難。その怒りのはけ口となるアメリカのアジア系企業。

こうして産み出される怒りは，やはり第三段階の鉄の檻の中に閉じこめられた者の怒りであり，それを海外へ向けて発散するため，その主因たる社会構造に眼を止めることができないでいる。しかし，今は第四の鉄の檻が我々を取り囲んでいる。冷戦時代が長く続いたため，核兵器など武器製造等で多大な利益を産み出してきたアメリカの企業は，ペンタゴンから自立できなくなってしまっている。多大な政府からの買い上げなくしては，その多角経営を維持できない状態にある企業は，未だに核兵器を作り続けるしかなく，それを政府に買ってもらうしかない。これにより現在アメリカは，地球を何度も破壊できるほどの核兵器を量産し続けている。そこでは『白鯨』のエイハブ船長とともに全ての従業員，乗組員が死へと向かう，生存者のいない世界が構築され続けている。今度の権力は姿が見えないため，「独立する」こともできないのである。